（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

（　熊本県立芦北高等　）学校　令和５年度（２０２３年度）学校評価表

1　学校教育目標

【教育目標】

「私は挑戦する、夢を実現するために」

【目指す生徒像】

・夢に向かって努力し、協働する生徒

・自分と他人を認め、人の心の痛みがわかる生徒

・課題を発見し、解決するために行動する生徒

【教師の目標】

ア　生徒一人ひとりを理解し、個性を見つけ、伸ばす教育を実践する。

イ　学習の基礎基本をもとに、発展させて生徒をワクワクさせる。

ウ　生徒・保護者・地域の期待を理解し、連携して目指す生徒像の実現に努める。

2　本年度の重点目標

【重点目標】

ア　すべての教育活動において「魅力ある人材の育成」の具現化

イ　すべての校務において課題の共有と課題解決の推進

ウ　教育環境の充実と活用による効率的・効果的な教育活動・校務（事務）対応の推進

エ　創立以来の歴史に学び、この１年を大切にして目標を達成

【教育方針】

ア　地域に学び、学びを地域に返す、地域に開かれた学校づくりを推進。

イ　１人１台端末及びＩＣＴを活用した教育活動を推進し、より効果的な学習指導を実践。

ウ　目標を高く持ち、チャレンジ精神旺盛な人材を育成。

エ　生徒自身による主体的、創造的な学習活動、特別活動を推進。

オ　部活動を推進し、生徒の心身の鍛練と活気溢れる学校生活を実現。

カ　図書館活用と読書による、読む力、考える力、表現する力を育成する。

キ　基本的生活習慣が確立できるよう、生徒を支援する。

ク　生活への指導と支援により、安心して過ごせる学校づくりを推進。

ケ　自己肯定感及び他者の個性を理解する心を醸成。

コ　自然との触れ合いや地域との交流から、自然と郷土を愛し、大切にする心を育成。

サ　各教科の学びや国際交流活動において、ＳＤＧｓへの取組みを推進。

3　自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	令和５年度の入学者（３学科）５３名を超える令和６年度の入学生を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦高教育の魅力を地域へ発信し、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。ＩＣＴ端末を活用した学校ＰＲ動画（YouTube）の制作と配信。	B	各科の特色を生かして、地元の小・中学校や地域と連携を図り、SNSなどを活用し、本校の魅力を発信することができた。学校ＰＲ動画等も更新し、様々な場面で活用し本校のＰＲにつなげた。
	業務改善	校務における課題解決の推進	各校務分掌の最低１つは課題に取組みチームで協働して問題解決を進める分掌組織。	年間反省をもとに校務分掌で課題解決の取組みを具現化する。町の支援事業を活用したレベルアップ事業と学科の専門性を活かした地域との連携を深める。学年・学	B	コロナ禍後の新たな生活様式を踏まえ、各種行事を４年ぶりに開催することができた。各行事は生徒・職員で協議し、コロナ前に戻すのではなく、新たな取組として実施することが

			学校行事の見直しと業務の効率化。	科、分掌における個々の経営感覚を高める。 業務の効率化とコロナ後の新しい生活様式を踏まえ、行事を計画する。		できた。町の総合支援事業を活用し、これまで以上に地域との連携を深め、各学科の専門性の向上につなげることができた。
	働き方改革	時間内での効率的・効果的な校務処理の推進	業務超過時間昨年比１０％減を目指す。１日１０分の実勤務時間の短縮と情報伝達システムの有効活用。	職員朝会週１回の実施。定例の職員会議の廃止。年次有給休暇年間５日以上取得する。ＩＣＴを活用して会議時間を短縮する。	A	時間外の勤務時間は前年度比でほぼすべての月において減少している。職員の業務改善への意識も向上し、働き方改革も着実に進んでいる。
	危機管理	豪雨等の災害を見据えた防災型教育環境の整備 不祥事根絶の徹底	不測の事態に対応できる機動性の高い学校組織の再編。 不祥事ゼロを目指し、地域から信頼される学校づくりを目指す。	自然災害等における防災行動の確認と避難訓練の実施。 月に２回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で確認し、不祥事根絶の意識を高める。短期集中型の効果的な職員研修を実施する。	A	避難訓練も適切に行われ、学校全体で防災行動の確認ができた。地元の消防団に参加いただき、放水訓練も実施できた。毎月２回、職員朝会で、不祥事防止の確認事項を確認するとともに不祥事防止の研修も効果的に実施することができた。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年１回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。 授業におけるChromebookの活用を積極的に行う。	各教科で主体的対話的で深い学びを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。 Chromebookを活用した学習保障を行う。 （１人１台端末先行実践校）	B	全教科において教育課程研究協議会に参加し、新学習指導要領及び授業改善、評価等に関する研修を受けた。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導をすることができた。授業でChromebookを活用した共同学習やChromebookの毎日の持ち帰りで学習保障ができた。
	授業力向上のための取り組み	授業の充実	公開授業週間を年２回、授業研究会を各グループ年１回実施する。 各教室に設置している電子黒板機能付プロジェクタを有効活用する。	研究授業では、同一学科を対象に専門学科と普通教科で連携して実施し教科横断的な視点に立った取り組みを行う。電子黒板機能付きプロジェクタ・Chromebook等のＩＣＴを活用した授業を展開する。	A	校内での公開授業週間を年２回実施し、指導力の研鑽ができた。芦北町の総合支援事業で導入した各教室の電子黒板とChromebookを授業で積極的に活用できた。
	「確かな学力」 の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間１０冊以上の読書量の確保を目指す。 毎月１回、漢字テストを実施する。 生徒一人あたり１時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の１０分間読書の充実を図る。 月１回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。 家庭学習時間確保のため課題を工夫する。 長期休業期間中、課題を出し学習させる。 町の支援事業で導	B	考査期間中も含め、朝の１０分間読書を実施し、朝読書が充実した。漢字テストは、学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは進学ゼミや公務員指導

				入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。		で積極的に活用されている。
キャリア教育(進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報源となる校内用ポータルサイトの内容を拡充する。求人検索システムの確立と運用。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりとの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、必要な情報について拡充する。	A	求人票検索をクラウドサービスに完全移行することができた。場所・時間を問わず利用でき、利便性が格段に向上した。
		進路保障	２月末には、希望進路達成１００％を目指す。全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	A	関係機関と連携しながら課題を持つ生徒に対しても細やかな支援・指導を行うことができた。
	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に２つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	A	２年生で英検２級に合格する生徒が出るなど、生徒の資格取得への意欲は旺盛であり、昨年度以上の成果が得られている。
生徒指導	命や人権を尊重する豊かな心の育成	社会規範意識の醸成と安全安心な教育環境の整備	ルールや校則を守るための判断力と自立心の向上を目指す。 ＳＮＳ等によるトラブルを防止する。 交通違反・交通事故０を目指す。	分かる指導、丁寧な言葉による指導を徹底する。 関係機関と連携し、学びの機会を確保する。 情報モラル教育・交通安全教育等についての講演会等を計画する。 交通委員による二輪車施錠の呼びかけや登下校指導、バイク通学生集会を実施する。 地域や保護者、教育相談部、SCとの連携を密にし、問題解決を図る。	B	相手の立場を尊重した行動が苦手な生徒もおり、生徒の規範意識の醸成や学校の雰囲気作りが非常に難しかった。ＳＮＳを通じた友人関係のトラブルも数件起こっている。また、自転車、原付による自損事故も２件起きた。薬物乱用防止・SNS安全利用教育は、１２月に実施できた。「特別な指導」は３件のみであった。
	自ら考え、学び、夢に向かって努力する主体的な態度の育成	基本的生活習慣の確立とコミュニケーション能力の向上	夢に向かって努力する生徒、さわやかな挨拶ができる生徒、人の心の痛みがわかる生徒の育成を目指す。	生徒会が主体となった行事運営や委員会活動の活性化を図る。 学級担任を中心とした、生徒の個性と長所を伸ばす指導・支援のための情報提供を行う。	B	芦高祭などの学校行事では生徒会が主体となって活動し、各企画団体においても生徒が主体的に、責任持って活動している様子が見られた。４年ぶりの一般公開となり、外部の観覧者に楽しんで頂けるよう、一生懸命に取り組む中で、生徒たちは沢山の学びを得たように感じた。 生徒の指導・支援に関しては、学級担任を主軸に、学年や学科、生徒部がより連動した組織的な対応が必要な場面があった。職員間の情報共有と生徒との積極的関りを推進する必要がある。

人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ１回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。 ＬＨＲ等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	今年度は参集型の研修が増えたため、積極的に研修案内を行うことができ、のべ46名が校外研修に参加することができた（荒天中止となった芦水地区県立学校人権研修の参加予定者を含む）。人権教育の校内研修では、人権同和教育課より講師を招聘し、充実した研修を行うことができた。 人権ＬＨＲの内容を教育相談部と学年部で検討し、昨年度より生徒の実態に合わせた内容を実施することができた。
	すべての教育活動を通した取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談部や生徒部と連携し、課題を抱える生徒の情報共有、支援について実践することができた。
	命を大切にする心を育む指導の充実	命の大切さを実感させる教育の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。人権週間、人権集会を実施する。	B	人権集会で生徒部と連携し、交通被害者遺族の講演会を実施した。１２月に人権週間を設定し、人権委員による昼休み放送・県こども人権集会への出席などの取組を行った。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成を目指す。 全クラスで生徒面談を学期１回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にする心を育む。 「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	A	いじめ防止につながる内容の講話（ＳＮＳ講話、交通被害者遺族の講演会）を実施した。生徒総会（６月）および人権週間（１２月）に「いじめを許さない宣言文」の確認を行った。
	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年３回実施して、いじめの実態を把握し、対策を早急に取る。 いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取り合い早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。（年３回のアンケート実施） いじめ防止等対策委員会を年３回実施し、外部専門家から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	B	心のアンケート実施後、１時間以内に状況把握・報告とスピーディな対応ができた。アンケート以外で発覚したいじめ事案に対しても、関係機関と連携し、適切に対応することができた。いじめ防止等対策委員会においては、いじめ事案だけでなく、気になる生徒について情報共有し、外部専門家からアドバイスをいただいた。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実	A	新入生の実態把握に努め、年度初めに生徒理解研修を行い、

			する。生徒理解の職員研修等を学期に１回行い、全職員の共通理解を図る。保護者の理解を得て、支援を開始する。	態を４月初旬までに把握する。「気づきメモ」週間、教科担当者会をふまえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。		職員間での共通理解を図った。新入生の支援対象生徒については、個別の教育支援計画・指導計画を作成し、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（３年生）の進路決定１００％を目指す。１・２年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	A	進路部と協力し、支援対象の３年生については、関係機関と連携を取りながら就職支援を行うことができた。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。 職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。 必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	教育相談部内で情報交換を行い、生徒の状況把握に努めた。スクールカウンセラーにはカウンセリングのほかに職員への助言、必要に応じて関係機関等との連携を図ってもらった。教育相談校内委員会を実施し、他部署との情報共有ができた。
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙなど）	コミュニティ･スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を年間２回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、災害経験を活かした地域合同防災訓練への参加等を検討する。また、町の方針に基づいた避難所運営についても検討する。	B	学校単体での防災訓練はここ数年で定着している。来年度以降地域合同防災訓練への参加を行えればと考えている。また、避難所運営に関して、現在の計画を基にさらなる改善をすることができた。
		平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会時に、平常時における地域連携に関する具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙千屋地区住民の参加型交流活動を検討する。	B	コロナが第５類に分類されたことにより各学校との交流活動も積極的に行うことができるようになった。また、芦高祭では４年ぶりに一般参加のバザー等を行うことができ、地域住民との交流を図ることができた。
		芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分に効果が上がるよう実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	A	総合支援事業を有効活用し、各学科・各教科特色のある取組を実践し、専門的な学びの向上に繋げることができた。生徒の進路実現に向けても大変効果的な取組となった。また、レベルアップ事業以外の事業でも本校の教育活動全般において有効に活用し、本校を全国にＰＲすることができた。

4　学校関係者評価
（１）　学科の特色を活かした取り組みがなされ、公務員合格や介護福祉士の資格取得、また大学進学など成果も上がっている。 （２）　入学生の定員確保の対策については、少子化の中で非常に厳しい問題であるが、中学校や地域と連携を深め、芦北高校に入学したいと思えるような特色ある取り組みや魅力を、ＩＣＴ等を活用し、積極的に情報発信して欲しい。 （３）　学校の魅力化に向けて、様々な工夫がなされている。魅力の発信についても継続的に行われていて、とても大切なことである。 （４）　進路指導においては、進学、就職にかかわらず生徒にとって生涯に関わる重要な問題であり、適切な進路指導が求められる。 （５）　介護の分野においては、社会福祉施設等で働く介護職・看護職などの仕事は、「人の命を支える」なくてはならない仕事であり、人の痛みが分かる心優しい生徒の育成を目指し、更なる人権教育の推進を期待する。 （６）　介護実習の受け入れに当たっては、コロナ禍ではあるが感染防止対策等を行いながら積極的に受け入れを行いたいと考えている。 （７）　学習活動において読書は、国語力や語彙力のアップに繋がるだけでなく、文章を書く力が身につき、また、想像力が高まり、色々な話題にも対応でき幅広い知識を習得できる場でもある。漢字テストとあわせて実施することにより基礎学力の向上にも繋がり、是非これからも実践して欲しい。 （８）　生徒指導面では、ＬＨＲ（人権教育）や情報モラル教育の必要性を強く感じた。特に「いじめ」や「ネットトラブル」等における対策など喫緊の課題と思われる。コロナ禍にあって、特にインターネット等の普及により、スマートフォンやＳＮＳ等の情報モラル教育の充実を図る必要があると感じる。 （９）　芦北町の総合支援事業により、これまでに電子黒板などが全教室に配備され、ＩＣＴを活用した教育活動が実践されている。県内でもこのような取組を行っている市町村は少なく、生徒をはじめご家族にとっても有り難く、芦北町独自の政策としても高く評価されている。芦北町や芦北高校を支援する会の活動は素晴らしく、地域の思いが伝わってくる。今後も引き続き、地域と連携を密にし、地域に開かれた学校経営に期待する。 （10）地元小学校との交流を強化していく取組はとても良い。特に、小学校低学年の児童に「あんなお兄ちゃん、お姉ちゃんになりたい。」という思いを持たせることが、近未来の芦北高校の基盤づくりにもつながる。 （11）「地域とともに森を育て川と海を育む」をテーマに、アマモ場やホタルの再生活動など、森、川、海の三側面から地球環境改善活動に取り組んで、地域貢献とともに環境教育の実践にも繋がっている。全国的にも高い評価を受けている芦北高校独自の取組であり、今後も継続した取組を期待する。

5　総合評価
（１）　教育目標「私は挑戦する、夢を実現するために」を掲げ、生徒が主体的に取り組む学習活動を実践し、家庭、地域と連携を深めながら目指す生徒像の実現を実践することができた。 （２）生徒募集では、年度当初に設定した目標を上回ることができた。また、在校生・保護者・職員の学校評価アンケートでは８割以上が概ね良好との回答であり、本校教育が肯定的に受け止められている。 （３）１人１台端末及びＩＣＴを活用した学習の拡充で、主体的・対話的で深い学びが実現し、生徒の各教科への興味関心が向上し、分かる授業に繋がった。 （４）部活動の活性化が学校の活性化に大きく貢献している。本校と地域スポーツクラブ活動との連携もあり、空手道部、新体操部、相撲部が全国大会出場を果たした。インターハイでは新体操部が団体で３位入賞、また個人で６位入賞、相撲部が個人で５位入賞と好成績を収めた。本校のみならず地域を盛り上げることができた。 （５）職員の細やかな指導、ＩＣＴを活用した効果的な進路指導で公務員合格１７名、国立大学合格１名など、今年も素晴らしい合格実績を残すことができた。就職内定率も１００％に近い数字を達成した。 （６）人権教育では「自分と他人を認め、人の心の痛みがわかる生徒」の育成を目指し、人権尊重の精神を高める多くの取組を行った。また、心のアンケートや個別の面談により生徒内面の把握に努め、職員間で情報の共有を積極的に行った。いじめや生徒間のトラブルには、早急に対応し、事案の早期解決を図ることができた。 （７）　生徒部、教育相談部等が積極的に情報を共有し、ＳＣやＳＳＷなど外部の関係機関とも連携し、誰一人取り残さない取組を実践することができた。 （８）芦北町の芦北高校総合支援事業を有効活用し、生徒の各種活動で結果を残すことができた。学校農業クラブ連盟全国大会熊本大会において、農業鑑定競技会（森林の部）

で３名の生徒が優秀賞を受賞した。その他、熊本県青年・女性漁業者交流大会で熊本県知事賞、第１９回アジア農業シンポジウムで最優秀賞、第１回全国海の再生・ブルーインフラ賞でみなと総研賞を受賞。東京で開催された国際アマモブルーカーボンワークショップに出場し、日頃の研究成果を英語で発表し、芦北高校の魅力を全国に発信した。

（９）４年ぶりに開催された芦北町国際交流協会の英国派遣事業に２名の生徒が参加した。イギリスの歴史や文化を学び、校内外での報告会で発表し、アンバサダーとしての役割を果たした。

(10) 芦北支援学校佐敷分教室と連携し、文化祭、体育大会、長距離走大会など様々な行事を協働で実施し互いの学びを深化させた。

(11) 地域防災教育の一環として、これまでの防火訓練に加え、地元消防団を招きポンプ車で放水等の実演を行い、生徒も実際に放水を体験した。生徒の防災意識の向上と地元消防団への理解に繋がった。

６ 次年度への課題・改善方策

（１）芦北町の総合支援事業を受け、生徒のレベルアップと町への還元をテーマに、生徒のチャレンジ精神を刺激する魅力的な取組をさらに進める。

（２）災害時の対応においては「平常時の対応」、「緊急時の対応」に分けて検討する必要がある。令和２年７月豪雨災害の経験を踏まえ、特に「平常時の対応」が重要で、検討を要する。地震についてもいつ起こるかわからず、早い時期に訓練が必要である。日頃から危険個所の把握や避難訓練、防災教育等を実践し、被害を最小限に留めるためにも、県、町、地域との連携強化が更に必要になってくる。

（３）専門教育では、各学科間の連携をさらに進め、地域や中学生とその保護者のニーズを的確に受け止め、地域と連携した教育活動を展開し、入学者の増加に繋げる。

（４）進路指導や部活動などで結果を残しながらも、働き方改革の観点から効率的で効果的な働き方を再検証する。

（５）芦北町からの総合支援事業の現状分析を行うとともに、今後の取組が生徒募集に繋がる事業へと発展していくよう様々な改善を行っていく。

（６）地域みらい留学参画に伴い、行政や企業、地域と連携し、早急に下宿先の確保に努める。県外も含め域外からの入学生の確保に努めることが必要である。

（７）各学科の取り組みとＳＤＧｓを組み合わせ、教育的効果のさらなる向上と学校の活性化を図り、本校の魅力を全国にする発信する広報活動に全職員で取り組む。

（８）生徒募集に繋がる学校パンフレットの作成、ＨＰの更新、ＳＮＳの活用など定員確保に向け、様々な方面から検討を重ね、実施可能な取組を全て実践する。